慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : Masayuki Okahara and Alena Prusakova "Arts-based research practices in sociology : undergraduate and graduate degree education" Arts-based methods in education research in Japan. Kayoko Komatsu, Kikuko Takagi, Hiroaki Ishiguro and Takeshi Okada (eds.) Brill 2022. 24-45
Sub Title	
Author	鈴木, 絵美子(Suzuki, Emiko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2023
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.28 (2023. 7) ,p.91- 92
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20230701-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

Masayuki Okahara and Alena Prusakova

“Arts-Based Research Practices in Sociology: Undergraduate and Graduate Degree Education”

Arts-Based Methods in Education Research in Japan

Kayoko Komatsu, Kikuko Takagi, Hiroaki Ishiguro and Takeshi Okada（eds.）

Brill 2022. 24-45

鈴木　絵美子

本論文は、日本の社会学で唯一アート・ベースト・リサーチ（ABR）を学習カリキュラムに取り入れている研究室でのABRの実践や成果を紹介する事で、社会学におけるABRの重要性と可能性について説明する分野において貴重な論文である。著者はABRの実践者であり指導者である慶應義塾大学教授の岡原正幸と大学院生のアリナ・プルサコワであり、自身の研究におけるABR実践の体験を振り返ることで、社会学におけるABRの価値について語っている。

本論文の内容は次の通りである。前半（第1章～第2章）は、日本でABRがどの様に始まったかを示すために、日本のABR第一人者である著者のエピソードを紹介している。著者は社会科学が思考・説明・議論といった学術的なアウトプットを重要視する故、人の感情や考えを上手くアウトプット出来ていないことに違和感を感じ、大学院時代にその答えを求めドイツで政治劇や演劇理論を学んだ。演劇が社会の底辺にいる人々の生活を表現し、同時に社会・政治の構造を客観的に示していることに感銘を受け、帰国後に演劇の歴史と重なりをもつ感情論の歴史を学び、感情の社会理論を展開し、日本初の感情社会学者となった。しかし感情社会学は充分に感情的ではなく、むしろ感情を論理的に説明・解釈・分析する過程で生きた感情を希薄化させていた。同時期にアメリカでキャロリン・エリスが生きた感情体験を無視する感情社会学を批判し、更に感情を感情的に研究する方法として「感情的社会学（emotional sociology）」を提唱した。これは感情的な経験を第一に、科学的な解釈を第二に重視する。例えば彼女はアートを用いて研究結果を発表し、オーディエンスに生きた感情体験を再体験してもらい、感情を感情的に理解し合うことに努めた。これがABRの始まりであり、著者もこの時期に自身の研究にアートを使ったABR実践を取り入れた。また、著者は感情社会学が皮肉にも感情資本主義を促進することについても批判し、更にABRがこれを解決する可能性を持つとしている。感情社会学は感情が管理されていることを明らかにするが、これは同時に感情を管理することを促し、従って感情管理を基盤とする感情資本主義を進めてしまう。この様なジレンマの解決策を著者はパフォーマティブ社会学に見出し、自身の演劇を用いた学部の授業の例を挙げながら、いかにこれが調査の過程で研究者である自己と研究対象である他者の感情に寄り添うことを促し、更にオーディエンスにも感情を呼び起こしているかを説明した。

鈴木絵美子「Masayuki Okahara and Alena Prusakova “Arts-Based Research Practices in Sociology: Undergraduate and Graduate Degree Education”」『三田社会学』第28号（2023年7月）　91－92頁

中半（第3章～第4章）では、大学・大学院の研究室におけるABR実践の例について紹介し、ABRの特徴や従来の質的研究との違いについて説明している。まず著者の研究室におけるABR実践の特徴は、アートをアウトプットに用いるだけでなく研究のプロセスにおいても用いるものである。よって研究過程とそのアウトプットは論文形式である必要はなく、アートとして提示される可能性を持ち、その為学術界から失われた身体・場所・協力という概念を取り戻すことが期待される。次に従来の質的研究とABRの違いは、研究の最も重要な情報源がアートである点、そして研究成果としてアートを用いる点において異なると説明している。更にABRはアートが媒体であるが故、研究成果が学術界の外にも届き、そして感情を再体験させる事が出来るのでオーディエンスの認識をも変える可能性を秘めていると見解している。

後半（第5章～第6章）では、日本におけるABRの現状について説明している。日本において社会学でアートは徐々に活用されるが、研究成果としてアートが使われることはなく、その様な発表場所も学術界にまだない。日本では論文を書かずにアートだけで博士号を取得することは未だ認められていないが、ABR実践を交えた博士プロジェクトは既に行われており、ビジュアルエスノグラフィーといったアートプロジェクトと論文を組み合わせたマルチな形式のものがそれに当たる。著者はより多くのマルチな形式をとった博士プロジェクトが見られる事を期待すると同時に、いずれは日本でもアートだけで博士号を取得することが出来る様になるのではないかという期待で締めくくられている。

以上がおおまかな流れであるが、全体を振り返ると著者が日本のABRの第一人者としてどの様な熱意・背景・目的を持ってABR実践をし、どの様な難点を抱えているかといった現状が分かりやすく説明されている。日本でABRを実践している研究室は他にないため、本論文に書かれている例や著者の体験は分野に大きく貢献する文献として、非常に貴重である。日本初の感情社会学者でありながら、感情社会学が感情資本主義を促進しているという問題点に気づき、その解決策としてABRを提唱し、実践する過程を分かり易くストーリー調で示している点は見事である。本論文は日本におけるABRの研究の基礎文献のひとつになるに違いない。

だからこそ、本論文の課題についても触れておかなければならない。ABRはあまり知られていない新規的な概念である為、基礎知識のない読者が概念を理解するのは困難である。本論文においてABRと質的調査の違いについて説明されていたものの、より多くの実例を示すことでより明確にABRの概念を読者に理解してもらえるのではないだろうか。本論文がきっかけとなり、ABRの概念が日本に浸透し、より実例が増える事を期待したい。

（すずき　えみこ　慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程）